

10年を迎えた先端基礎研究センター

— 近頃人間について思っている諸々のこと —

基礎研究推進室長 中井川 泉

先端基礎研究センター（センター）は、今年（平成15年）4月で設立満10周年を迎えた。これまでセンターの各研究テーマに直接関与した方々ばかりでなく、内外関係者の皆様のお陰もあって、センターがこの10年間で原研の中においてその存在が成熟したものとなったことは、誠に悦ばしい限りである。私のような、センターの研究活動がある意味で裏方として陰ながら支援していく立場の人間としては、この時期にセンターに所属している幸運を噛みしめながら、今後とも研究に携わる方々が充実した活動を行えるように（欲を言わせてもらえば、なおかつよい成果も得られれば）、と日々それを思うばかりである。

御承知の方々が殆どと思うが、センターのテーマは基本的に5年の期限を以て終了する。従って、10年という区切りは、2期目のテーマが終了し3期目に入る時期であって、まさに十年一昔という言葉どおり、時間経過の速さに感慨も一入である。

別におめでたい話に水を差す意図は毛頭ないのだが、この「区切りの数字」ということについて言及すると、兎角世間では必要以上に話題に取り上げられる傾向があるように感じている。私などは生来の天の邪鬼だから、新記録のような数字というならいざ知らず、この「区切りの数字」というものに世の中（マスコミ？）は拘り過ぎではないかという気がしている。先日、イチロー選手が大リーグ3年目にして早くも五百本目の安打を記録したが（既に六百本にも到達！）、常々安打数に拘っている同選手は、いつも打率々と喧しいマスコミに「特に感想なんかない」と応じたのも、「区切りの数字」というものの位置付けを別な意味で象徴している出来事であった。

数字といえば「記録」に繋がる訳だが、卑近な例でスポーツというものは勝ち負けの世界で、基本的に選手は「（勝つということ）記録に残る」よう日夜切

磋琢磨しているであろうに、どれだけいい成績を残したかあるいはどれだけ勝ったかよりも、実は我々は、総体的な成績は大したことない選手が一世一代の大勝負に勝ったり、どう見ても実力的には圧倒していた選手が悲運で勝てなかったり、ということが忘れられなかったりすることが往々にしてある。これがよくいわれる「記録より記憶」ということなのであるが、恐らくこのように人々の記憶に残っていくためには、その選手の人物像というものが大きな要素となっているものと思う。つまり、スポーツマンとしての気概、正々堂々ぶり、爽やかさ、（敗者であっても）潔い態度、などの人物像と相俟ってその勝負が記憶に残るわけで、この正反対の人物の勝負というものは、たとえ記録的に傑出していたとしても、記憶に残る例は少ないのではないだろうか。歴史というものは勝者の歴史、と云われ、確かに歴史書は勝者の側からの記録であるが、一般の人々の中では例えば「民間伝承」という形で、戦には破れたがあつた武将は大したものだった、という話が連綿と受け継がれていくことを考えれば、むしろ悪びれない敗者こそ人間の記憶に刻まれていくものだとつくづく感じ入る。

翻って最近の科学の世界を顧みると、勝者ともいべき方々ではあるが、昨年の日本人ノーベル賞受賞者、小柴昌俊東大名誉教授の飄々としたマスコミへの応対や、田中耕一氏の真摯で偉ぶらない控えめな態度など、その人間性は忘れ難いものがある。

このようなことに想いを馳せていくと、研究者の方々には、一級の成果とともに是非とも滑々しい人間性も備わっていて欲しい、と思わずにはいられない。その上で、多少風変わりなくらいの個性的な研究者であることも望みたい。ハーバード大学の某先生が言われたそうだが、「科学者は他と違っていることこそ大切」なんだから。